

九. 脱ぎ捨てようとしているもの

十二月に入ると、毎朝霜が降りるようになった。工事屋たちの朝一番の仕事は焚火となっていた。ハウスの周りに集められた工事の残材のうち、木材やダンボールがかなりの量になっている。両手をズボンのポケットに突っ込み、首を縮めて出勤してきた工事屋たちは、荷物をハウスのテーブルの上に放り出すと、残材の山の中から手頃な木材を引っ張り出す。

火が燃え上がり、男たちがその周りを取り囲む。身体の裏と表とを交互に温めてから男たちは着替えをし、再び火にあたる。暖気を身体にたっぷりと含ませてから男たちは現場へと向かう。いつも最後になる川村が、用水槽から汲んできたバケツの水を注いで火を消す。

既に工事はほとんど終わり、試運転の準備が進められていた。業者たちは皆去っていった。川村と圭介と高瀬の三人が残り、高瀬の部下の若者が一人応援に来ていた。

しばらく前に高木が現場に姿を見せた時、試運転日までに材料が準備できるかどうかを、圭介は確かめてみた。その時高木は目尻にしわを寄せて笑いながら、「そんなことより自分たちの工事を間に合わせるよう、真面目に考えたほうがいいんじゃないですか」と言って取り合わなかった。

試運転日が三日後に迫った今日は、何としてでも確答を得ておかねばならぬと、圭介は考えていた。試運転日には客先の幹部たちが来るので、それに合わせて圭介の会社の営業部長や設計部長を出席させる必要がある。そのためには試運転の実施日を明確に掴んでおかねばならないのだ。

圭介と高瀬は事務所の高木に会いに行った。圭介たちの話を聞いても、高木は疑い深い表情を変えなかった。

「本当に三日後に試運転ができるようになるのかね。今までお宅らの仕事は前口上の通りに行ったものは何もないじゃないですか」

「いや、今度は絶対大丈夫ですから、是非材料を……」

「うむ……。まあ材料は造ろうと思えば何時でもできますよ。本当に大丈夫なんだろうな」

「はっ、絶対に……」

高木は相変わらず信用していないようだった。圭介たちはすごすごと引き上げて行った。現場へ戻る道々、圭介は決心せざるを得なかった。三日後に試運転という日程で連絡してしまおう。三日後の材料が無くて試運転ができなければ、その時はこっちの立場が強くなるはずだ。部長からは後でひどく怒られるだろうが仕方がない。

現場では電気制御の微調整が行われていた。圭介が電気室に入って電気調整員たちの仕事を見ていると秋山がやって来た。最近では珍しいことだった。秋山は真剣な顔で、本当に三日後に試運転ができるのかと訊いた。

圭介は電気調整の主任を呼んで細かく説明させた後、絶対に大丈夫だと断言した。口元を引き締めてそれに強く頷いた秋山の顔は紅潮し、何か強い決意を秘めているのが窺われた。

「お宅らが一生懸命やってるのに、うちサイドは全くなってないのですよ。先ほどの事務所の話は皆聞こえていましたがね、材料の準備なんか何もできちゃいませんよ・
・・・」

「ええっ・・・・」

「うちの高木あたりは、お宅らが間に合いっこないと思って、材料を手配する気もないんですよ。自分の目で確かめてもみないで・・・・」

「それではうちの方が困るんですが・・・・」

「お宅らが間に合いそうだと分かったら、きっと何か些細なことにでも難癖つけて引き伸ばすつもりなんでしょうがね。そんなことしたらお互いの得にならんのにね。私はもう黙って見ていられないんですわ。私が工場長に直接話して会議を開いてもらいます。会議の席で今話を全部してくれませんか。私は黙ってますから」

「はあ、うちもその方がありがたいですわ」

秋山は、頼みますよ、と念を押して帰って行った。

その日の午後遅く、圭介と電気調整の主任の二人が事務所の会議室に呼ばれた。会議卓の中央に工場長が席を占め、その左に高木が座っていた。秋山は会議卓の右隅にそっぽを向いて座っている。

圭介たちが席に着くと工場長が口を切り、工場の現場と今後の予定を詳しく話してほしいと言った。電気調整の主任が説明し、圭介がそれを補足した。高木が説明の途中で細かい点に質問を挟んだ。

それが度重なってくると圭介はイライラし始めた。これが秋山が言っていた引き伸ばし作戦か、と思うと無性に腹が立った。秋山は相変わらずそっぽを向いたままだった。工場長がそれを放任しているところを見ると、秋山は工場長にかなりのことを言ったらしい。

高木が、張力制御の方法がまずいのではないかと言い出した時、圭介の我慢はとうとう限界を越えた。

「高木課長っ、この会議は工程会議でしょう。話題は工程の話だけに絞ってもらえませんか。張力制御の方法の話は別の時に伺いますから。それに今話はもう何ヶ月も前に図面を提出した時に済んでるはずですよ」

圭介の強い口調に驚いて秋山が思わずこちらを向いた。高木は目を大きく見開いて、視線を落ち着きなく宙に泳がせた。圭介は工場長の顔をちらっと窺って、高木の顔をじっと見つめていた。圭介は覚悟を決めていた。工場長とだって徹底的に対決してやる。そう考えながら圭介は、自分が興奮しているのを感じていた。

「話のポイントを絞っていきましょうじゃないか。どうぞ続けてください」

工場長は温和な顔を崩さずにそれだけ言った。電気調整の主任が再び説明を始めた。高木は一言も言わずに聞いているばかりだった。工場長が電気調整の主任や圭介の話を受けて対応していた。

現場は綺麗に片付けられ、もはや工事現場の様相は消えていた。本体の前には細長いテーブルが据えられ、その上に「祝竣工」と書いた紙を貼った酒樽や一升瓶が並べられた。製造現場には不釣り合いな、小綺麗なスーツに身を包んだ年配の男たちが、機械の周りをうろうろと歩き回り、工場長や高木たちが得意げに説明をしていた。

圭介たちは機械から離れて窓際に立っていた。この日の主役は作業服を着た工事屋たちではなく、スーツ姿の血色の良い男たちであることは誰の目にも明らかだった。試運転は予定通りに実施されることになり、竣工式が行われようとしていた。

圭介はスーツ姿の男たちが歩き回るのを眺めていた。男たちの表情は一様に明るく、穏やかな笑みをたたえていた。彼らは饒舌でもあった。この設備の建設の成功は、この時に在職中である彼らの業績のうちに数えられるのだろう。彼らの笑みはそれを誇っているようにも見えた。

スーツ姿の男たちを眺めながら、圭介は自分たちがやってきた工事のことを思い出していた。作業の現場が一つ一つ浮かび上がり、汗と油にまみれた作業者たちの顔が見えていた。喧嘩や談笑、事故と怪我などの場面が次々と圭介の頭の中を通り過ぎた。

笑みをたたえた小綺麗な男たちの姿が、圭介の頭の中の場面に重なった時、圭介はやりきれない気持ちになっていた。それは寂しさを乗り越えた不快な感情となって圭介の顔に現れた。

「俺は式が終わるまでハウスで待っとくぜ」

隣に立っている川村にそう告げて圭介は工場を出た。川村も居づらい雰囲気を感じて居たのか、「俺もそうするよ」と言って圭介の後を追った。二人がハウスに入るとしばらくすると高瀬たちが戻ってきた。結局、工事屋たちは全員式場から立ち去ったのだった。

あのスーツの男たちにとって、工事屋たちは工数という数字の意味しか持たない。

工事屋たちの苦しみや喜びなどは、彼らには何の意味もないのだ。工数と資材の物量だけが彼らにとって意味をなしている。工事屋たちが苦しんだり、喧嘩をしたり、怪我をしたりして造り上げたものを、彼らは工数と物量で計算して自分たちの業績にってしまう。

「工事屋なんてつまらんもんやな」

圭介の呟きを川村が聞き咎めた。

「何でや」

「だって、そうやないか……」

圭介は思いつくままに喋り続けた。川村も高瀬も、首を小さく縦に振りながら聞いた。圭介の言葉が途切れた時、川村が口を挟んだ。

「でもなあ、工事屋いうたらそんなもんやで。そんなこと考えとったら仕事できんがな」

「それは安田さんの考え方やろう。川村さんらほんまに腹立つことないんか。あいつらはな、俺たちが工事で腕を一本切断するような怪我をしたって何も思わんのやで。事故件数の中の一件に数えられるだけや。いやそれだけやない。『この事故が今回の建設工事の最大の汚点だった』なんて言いかねんのや。腕を落とした人間の苦しみなんて解ろうともせん。そんなやつが俺たちの苦勞の成果を自分の業績みたいに吹聴して歩くんやからなあ……」

重苦しい空気がハウスに漂っていた。四人とも口をつぐんでしまった。煙草の煙だけが軽やかに室内を泳いでいた。工場内では竣工式が進んでいた。

試運転が終わり、帰り際に事務所の前を通り掛かった圭介たちを秋山が呼び止めた。

「真藤さん、ちょっと相談があるんですが……」

そう言って、秋山は他の三人に先に帰ってもらうよう、頼み込んだ。

その夜、駅の北側の小料理屋のカウンターに、圭介と秋山が並んで肘をついていた。秋山が誘ったのだ。胃のほうは大丈夫なのかという圭介の心配をよそに、秋山はよく飲んだ。喉の奥につかえていたものが取れたように喋りまくる秋山に、圭介は専ら聴き役にまわっていた。

あの会議のあった日、工場長に談判した時のことを秋山は得意げに喋った。今までの工事の経過を洗いざらいぶちまけ、こんなやり方では自分たちにも相手方にも何の得にもならない、もう自分は高木のやり方にはついて行けない、高木がこのまま続けるなら自分はこの仕事から下りる、秋山はそう申し出たと言う。

工場長は驚いて考え込み、ちよつとの間を置いて口を開いたとのことだった。

「完成までは高木君にこのままやらせることにしよう。その後は君に任そう」

これが工場長の結論だったようだ。

「これからは私がやりますからね」
秋山は明るい表情を浮かべていた。

秋山は工事に関係していた工場スタッフの内情を圭介の前にさらすつもりでいるようだった。数々の些細な難癖は全て高木から出たものらしかった。高木は自分で言わずに秋山に言わせていたのだ。現場の状況をつぶさに見ていた秋山には無理だと思われることでも、高木は強要した。それが度重なって秋山は胃を悪くしていった。胃が悪いという診断を得た秋山は、それを盾に現場廻りを下りたのだった。

秋山の高木批判は痛烈だった。高木はもともと自分で判断を下して決定できるような人材ではない。誰かに問題を投げかけておいて他人の判断を引き出し、それに対してごちゃごちゃと注文を付けるのだ。そんなことをして一角の仕事をしたつもりでいるんだから始末が悪い。そんな話が次々と出てきた。

「無能な者は下りたらいいですよ。そんなのが大事なポストに座っているから進歩がないんですよ、うちの会社は」

「・・・・・・・・」

「その点お宅の会社は立派ですなあ。適材適所、ぴしっとした人材を然るべきポストに置いておられる・・・・・・・・」

言葉の端々に秋山の心のほとぼしりが感じられた。高木の下で鬱屈していた精神が今、伸びを一つして動き出しているのだった。

秋山の心の叫びを耳にしながら、圭介は不安な気持ちに落ち込んでいった。秋山の言う通りに違いないが、そこには何か欠けている。そう思いながらも、その欠けているものを圭介ははっきりと掴むことができないでいた。一年前の自分だったら、一も二も無く秋山に同調していただろうと圭介は思った。

秋山は、通り抜けていくこの秋の中で圭介が脱ぎ捨てようとしている殻に入り込もうとしているのではないか。圭介はふとそんな感覚に捕らわれた。

「無能とか有能とか、一般によく言われてますけど、能力って一体何なんですかねえ・・・・・・・・」

圭介が言えたのはそこまでだった。秋山は圭介の言葉を理解しなかったらしく、機嫌の良い表情は終始崩れることはなかった。